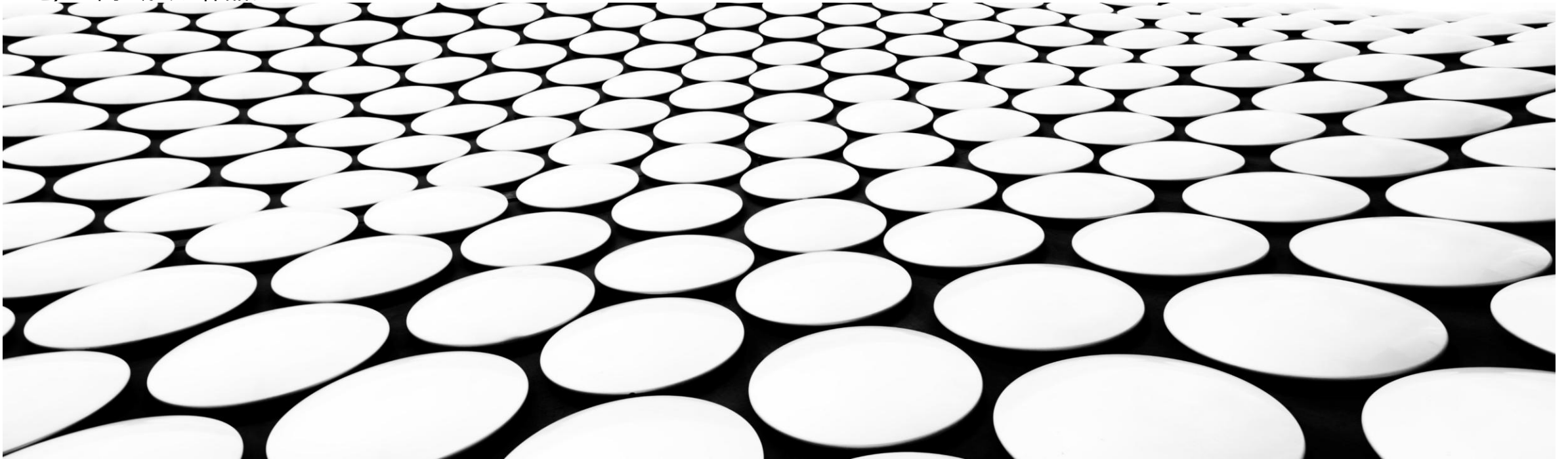


宮崎駿監督最新作「君たちはどう生きるか」はおススメ!!

この作品「君たちはどう生きるか」は宮崎駿監督が観る側に生々しいまでに自身の持てるものをほとんど全て投げつけた作品で、宮崎駿監督自身はこう生きてきたけれども君たちはどうか、と正しく映画のタイトル通りに宮崎駿監督が観る側に氾濫する意味の洪水を引き起こしながらその中でも直截的（ちよくせつてき）に問いかけた作品。



1.なぜ、敢えて宮崎駿監督は「君たちはどう生きるか」で自身の過去の作品を想起させているのか

- この「君たちはどう生きるか」ではどこを切り取っても宮崎駿監督が過去に手掛けた作品を想起させるように構成されており、それは私が思うに、宮崎駿監督の畢生の大作となるから観る側は腹を据えて観る覚悟を決めなければ「？」となり、何の映画だったのか解らずじまいで「君たちはどう生きるか」に置いてきぼりを食らうことになる、との宮崎駿監督の覚悟のように思うというのが一点。
- それではなぜ、宮崎駿監督は敢えて自身の過去の作品を想起させるようにしたかといえば、それは観客とガチンコ勝負をするため、つまり、宮崎駿監督が持てるものを全てを繰り出してでしか観るものとのガチンコ勝負は出来ないと覚悟を決めてのことと思われる。
- そのためか、「君たちはどう生きるか」は最初からサイレンが鳴り、主人公・真人の母親の火事による死から始まっている。つまり、最初から緊迫しているのである。はじめのサイレンで宮崎駿監督と観客との勝負のゴングは鳴り、次々と宮崎駿監督が繰り出す強烈至極な攻撃を観るものは真正面から受け止めなければ、たちまち渾沌へと誘う宮崎ワールドに呑み込まれ、訳が分からない状態になる。それは観るものが「君たちはどう生きるか」の過剰な氾濫する意味の洪水に押しつぶされてしまった証拠である。

主な登場するものたち



主な登場するものたち



- 「君たちはどう生きるか」を観て過去の宮崎駿監督作品が想起されるということは、連綿と続く日本文化の中での文脈でいえば、掛詞（かけことば）、つまり、最低限、「君たちはどう生きるか」ではどのシーンもダブル・ミーニング（2重の意味）となっていることを意味している。もう故人となってしまったが、吉本ばなの父親の思想家・吉本隆明流に言えば、「君たちはどう生きるか」は何重もの意味が錯綜（さくそう）する多層構造、あるいは重層構造といえる。
- だから、「君たちはどう生きるか」はいくつものいくつもの解釈が可能な作品構造をしており、それに目が眩み惑わされて宮崎駿監督の思う壺に陥ると「単にこの作品は宮崎駿監督のオムニバス作品（寄せ集め）に過ぎない」とか「難解で訳が解らない」とかとっても浅い解釈しかできない思考停止状態に陥ることになる。
- 思うに、これは飛躍的すぎるかもしれないが、解る人には解ると思うが、宮崎駿監督は「君たちはどう生きるか」でジェイムズ・ジョイスの最後の小説『フィネガンズ・ウェイク』—この『フィネガンズ・ウェイク』という小説はジョイスが造語を次々と繰り出し、敢えて意味を曖昧にさせることで言葉では表せないものを何とか表出させようと試みた、または、それは裏を返せば言葉に永劫にたどり着けないという意味不明のアルファベットの羅列が並んでいるだけの難解極まりない作品になりかねないのに、ジョイスは敢えてその危険を冒してでも一語にそれこそ多層の意味を付与するということでもないことをした作品として読める—をアニメーションで試みたかのような印象さえ抱かせるのである。
- そのことは、想像するに、宮崎駿監督も一人の人間であるから自分を晒（さら）すことに羞恥はあり、自身を投げ出すことが恥ずかしく、観るものを煙（けむ）に巻きたい欲求にかられながらも、しかし、それに抗しながら、氾濫（はんらん）する意味の洪水に呑（の）み込まれそうになりながらも、この映画ではあまりに直截的に宮崎駿という人間のこれまでを、「君たちはどう生きるか」でさらけ出している。その一つの例として、主人公・真人が石で自分の頭を殴りつけ大けがをすることから宮崎駿監督は自身を切り刻むように己をさらしていることから解るように思う。この真人が石で頭にけがをすることの他の解釈は後程語る。
- 敢えて言えば、最初は宮崎駿監督が見せしめのため、あるいは観客の人身御供（ひとみごくう:生贄）として磔（はりつけ）にかけているように見えていたと思ったら、いつの間にか宮崎駿監督と観客の立場は逆転し、磔にかけられるのは観客のほうなのである。そうして、宮崎駿監督が描きだした場面場面が石磔（いしつぶて）となり、「さあ、さあ、お前はどう生きる？」との問いを観客へと容赦なく投げつけるのである。その烈火の如き憤怒は宮崎駿監督自身に向けられたものでありながら、そのまま映像化しているので、映画を見るほうは、1シーン1シーンが痛ましいのである。

2.なぜ、宮崎駿監督は「君たちはどう生きるか」に過剰ともいえる氾濫する意味を持たせたのか

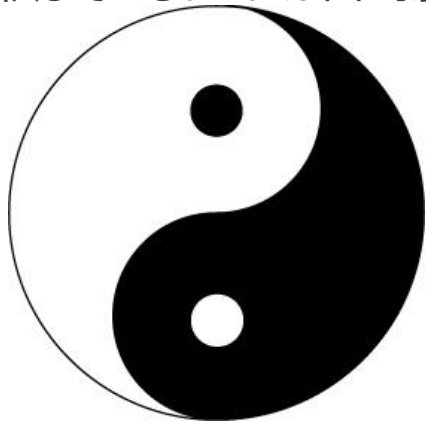
- それこそこの映画のタイトル「君たちはどう生きるか」につながる。つまり、歴史を見れば一目瞭然なのだが、例えば歴史上に起こった一つの出来事をとっても人類の総人口分の解釈があると言われるように、宮崎駿監督の心の内に「俺の人生がそう簡単に解ってたまるか！」という思いがあると思われ、もしかすると宮崎駿版の『藪の中』(芥川龍之介著)を試みたのかもしれない。
- そして、輻輳（ふくそう:集中して滞ること）し、滞留する意味は宮崎駿監督ならではの強引ともいえる手法で流れ出し、というのもこんな芸当が出来るのは現時点で宮崎駿監督以外いないのであり、そして、過剰な意味が輻輳し、滞留するアニメーションが流麗に展開して行くことになる。
- しかしながら、宮崎駿監督は根本のところではどこまで行っても直截的な問題提起を崩さず、それ故に「君たちはどう生きるか」は一見するととても解りやすい作品でもあるのは確かである。この作品を難解という人は無心で「君たちはどう生きるか」を観ていないように思う。また、あそこの場面が過去のどこどこと同じなどと類推することで終わっている人はまんまと宮崎駿監督の罠にはまった人といえる。
- つまり、この「君たちはどう生きるか」には陥穽（かんせい:落とし穴）が至る所に隠されていて、油断をするとその陥穽に真っ逆さまに落ちることとなる。
- それだけスリリングで危険なことを宮崎駿監督は「君たちはどう生きるか」に仕掛けてしているのである。何故かといえば、そこには私語りの恥ずかしさ隠しがあるのは当然として、これまでの宮崎駿監督の作品のレビューが宮崎駿監督の納得が行くものではなかったからに違いない。その憤懣が堰を切って「君たちとはどう生きるか」では奔流となって溢れ出しているのである。「おれが解るならかかってこい！」という宮崎駿監督一流の照れ隠しであり、また、憤怒にかられる宮崎駿監督の胸中は察して余るものがある。

3.「君たちはどう生きるか」のあらすじは敢えて伏せておくけど。。。

- しかし、大まかにいえば、「君たちはどう生きるか」のあらすじは第二次世界大戦中に真人に起こった現実での出来事と多分、真人の夢奇譚（ゆめきたん:夢の不思議な話）が語られているだけである。
- この「君たちはどう生きるか」は夢とも現実ともつかぬ宮崎駿流の世界が脈動するのはいうのを待たず、敢えてそうすることで夢奇譚としても完結した、とても強靱（きょうじん）な宮崎駿監督の思う「世界の根本」が描かれた作品である。
- あらすじはここでは詳しく書かないことにする。ただ、例えば一例をあげると、真人が気を失って気が付くのを水面に浮き上がってくるように描くなど等は、私自身が過去に考えていたことと同じで、そんな描写がいくつも鏝（ちりば）められていて、そこから導かれるのは、宮崎駿監督は自分を実験台にして相当深く物事を考えていることが想像に難くない。
- 例えば夢を考えてみると、夢の主人公はいつも「私」である。そして、過去、現在、未来の時間軸は同列化されて、過去、現在、未来は解き放たれて、無秩序で渾沌（こんとん）とした世界に「私」は放り出される。ここにこそ夢の醍醐味があり、宮崎駿監督はその夢の醍醐味を知っているからこそ、夢とも現実とも区別のつかないその境界が曖昧な世界で、「私」が主人公の奇想天外な世界が繰り広げられることになる。その世界がこれまた、痛快で、奥深いからジブリ作品の多くは、いつまでも人気不衰えぬように思う。つまり、そこにジブリ作品に観るものがのめり込んでしまう仕掛けがあると思われる。「君たちはどう生きるか」もそんな映画の一つといえる。

4. 畢生、「君たちはどう生きるか」は宮崎駿監督作品の中でも大変面白い、多分、最後の大作である

- なぜ、「君たちはどう生きるか」は面白いかというと、宮崎駿監督が考える「世界の根本」を見るのは、この「君たちはどう生きるか」が初めてではないかと思うからである。それまでの作品では暗に匂わせていたけれども、「君たちはどう生きるか」では具体的な絵として表現されている。四角柱や球や三角柱や円柱などの石でできた積木が積み上げられた今にも崩れそうな本当に微妙なバランスの上に「世界」の秩序が成立していて、いつ崩れてもいいというのが、宮崎駿監督の「世界の根本」であるようだ。宮崎駿監督が絵として描いたことに対してその勇気のお返しとして私自身のことを言えば、私の世界の根本は陰陽五行説（おんみょうごぎょうせつ、または、おんみょうごんぎょうせつ）の根本に位置する宇宙を表している陰陽太極図に近い。それは、陰陽という二つの対のものが互いを追いかけるように太極 = (円、もしくは球)の中をめぐり、陰陽五行説の肝である目玉のごとくある陰中の陽と陽中の陰が厳然と存在し、根本のところでは陰と陽が突然に逆転し、そして、それが鎖のチェーンの如くにつながっているのが世界と私は解釈している。これは宮崎駿監督とは根本で真逆である。
- 陰陽太極図



- 多分、多くの人は、「君たちはどう生きるか」に登場する人間以外のほとんどが人と化した鳥、つまり、鳥人、そして、鳥そのものなのかという疑問が起こるかもしれないけれども、私ならではの解釈を綴れば、葬式の様式の中に奇葬と言われている鳥葬というものがある。鳥葬というのは死したものの屍（しかばね）を猛禽（もうきん）が集まるところに横たえ、死肉を猛禽に食べてもらい、骨のみにするという葬式の様式である。そのことで、死んだ者は死肉を猛禽に食べられたことによって天へ召されるというもので、「君たちはどう生きるか」では宮崎駿監督は「死」と真正面から向き合っているので、死者の弔いの象徴として鳥人や鳥が、登場するもののほとんどなのだと思えて仕方ないのである。「鳥葬を何と残酷な！」と思うかもしれないかもしれないが、鳥葬が行われているところでは猛禽そのものが神聖なもので、猛禽は神の使いなのである。つまり、鳥葬はとても厳粛な葬式の様式なのである。しかし、鳥葬は非文明的とよその国から—主に欧米各国—の干渉で、現在、行われているところはほとんど姿を消してしまったのが実情である。この構図は日本の捕鯨と同じである。死ばかりではいたたまれないので、そこは宮崎駿監督、いんこの鳥人を時にコミカルにも描いている。それはまさに人間の戯画である。
- そして、鳥人、主にインコの鳥人が、真人たちがアオサギに案内された「下の世界」を取り仕切り、そこはインコの帝国となり、生活の場としていて、「下の世界」の主、大伯父とインコの鳥人の長、インコ大王とは何かの密約で結ばれているのか、インコ大王は大伯父には逆らわずに僕（しもべ）として「下の世界」を仕切っているのである。
- そこに若きキリコーキリコというのは真人が東京から移ってきた大屋敷の侍女7人の一人で、侍女たちのまとめ役と思われる—が捕獲した古代魚のような大きな魚の内臓をたらふく食べた人間の誕生未然（みぜん:前）の魂の象徴としてのワラワラが人間になるべく「上の世界」へ向かって飛び立つとき、登場するのがペリカンである。そして、「下の世界」の海にはほとんどペリカンたちの食べ物がなく、仕方なくペリカンは「上の世界」へと飛び立ったワラワラを食べるのである。しかし、若き真人の母のヒミが火を使ってペリカン共々ワラワラをも焼き殺して、ペリカンを追い払うのであるが、それに心を痛めるのが真人なのである。
- 宮崎駿監督はどの作品でも食べるシーンが大変印象的だが、生きてゆくには食べなくてはならないということをペリカンにワラワラを食べさせることで語っていると思われる。
- そこで、真人は致命傷を負ったペリカンを見つけ、なぜ、ペリカンたちはワラワラを食べなければならないかを聞き、「下の世界」の海にはほとんど何も無い地獄であるとのペリカンの断末魔を聞き遂げた後に、死んだペリカンを葬るために穴を掘るのである。多分、それがアオサギには気に入らないのである。

5.ラストのクライマックスへ向かう宮崎駿監督の膂力（りよりよく:腕力、パワー）は物凄いの一言

- 真人が空から降ってきたという塔へと足を踏み入れてからクライマックスへと向かう宮崎駿監督の膂力は物凄く、素晴らしいとしか言いようがない。真人と大伯父との邂逅（かいこう）、そして、「下の世界」の崩壊までは、息つく暇のない、宮崎駿監督アニメの神髄が詰まっている。
- 真人と大伯父との邂逅は、「下の世界」を存続させるためには、大伯父は何としても血のつながりがある真人に会わなければならなかった。それは大伯父はすでに歳を取り過ぎていて、「下の世界」が失われる前にどうしても真人に「下の世界」の主として、「下の世界」を限りなく永劫に存続させてほしいのであるが、真人はきっぱりと大伯父の申し出を拒否する。そこへ、大岩が宙に浮く「下の世界」の中心まで潜り込んできたインコ大王が机に転がり置かれている石の積み木を積み上げて、こんなものでわれらの帝国が左右されていたのかという憤怒にかられ、抜刀一閃（ばっとういっせん）、積み上がっている石の積み木を叩き斬ってしまうのである。
- そうして間髪を入れずに「下の世界」は崩壊を始める。真人とヒミとアオサギやその他の「下の世界」で生きてきた鳥人は崩壊する「下の世界」から脱出するべく逃げ、大伯父は真人とヒミに己の時間の道を行けと言い残し、そして、暗黒の宇宙の藻屑（もくず）として消えてゆくのであった。
- これは、宮崎駿監督がテレビのドキュメント作品の中で語っていた盟友、高畑勲の死を受容した瞬間なのかもしれないとも思う。
- そして、真人とヒミはお互いの生きる時代に通じるドアを開け、ヒミは将来火事で死するのに真人を産むのが楽しみと言い残してそれぞれの人生を生きてゆくのである。
- インコの鳥人たちは真人の時代に出てインコとなって飛び立つのである。
- 最後は……。

6.まとめ

- 「君たちはどう生きるか」は宮崎駿監督にとっては畢生の大作と言っていい作品である。これは多分に、宮崎駿監督が未来ある者たちへの伝言でもある。作品中に出てくる「ワレヲ学ブ者ハ死ス」という言葉は、様々な解釈が可能で、この「ワレ」が問題なのである。この「ワレ」を宮崎駿監督自身とすれば、宮崎駿監督の作品を学ぶものは大成せずに死すと捉えることが可能であり、また、この「ワレ」を私自身とすれば、私という存在を学ぶものは死す、つまり、これこそ私が大好きな作家、埴谷雄高の「自同律（じどうりつ:私は私である）の不快」を意味し、あるいはキルケゴールの『死に至る病』（絶望こそが実存する私を死に至らしめる）に通じるもので、これは私個人の感想なのだが、宮崎駿監督は「君たちはどう生きるか」で埴谷雄高の発想をもとに一例えば埴谷雄高の『死霊』から零れ落ちたものを集めた手といわれる『闇の中の黒い馬』という著作で試みた不可能性なものを仮構してでも表現するというものを何か所か引用していると感じた部分があるので、この解釈もあながち間違いではないと思う。また、現実の埴谷雄高の逸話として例えば埴谷雄高は或る時期、鳥を家の中で放し飼いで飼っていて、インコの帝国みたいなものが出来上がっていたことがあるなど、ところどころに埴谷雄高の面影が見えるのである。
- さらに、「ワレ」を大伯父とすれば、真人以外、大伯父を学ぶものは死すとも捉えられることが可能で、なるほど、「下の世界」は人食いのインコの鳥人が仕切っているから、間違っ「墓」に迷い込んだら、必ずインコの鳥人に調理されてしまうこと必定である。この三様を始め、まだまだ、この言葉はいろいろと解釈が可能である。この言葉の解釈は人それぞれ違って良いし、それは胸の奥にしまっておくべき宝物である。
- また、これまで、真人の母が火事で亡くなった後に母の妹の「夏子」が真人の継母となったことにはほとんど触れていなかったが、この「夏子」という女性の存在は真人にとって、当然最初は遠い存在で、父親のパートナーであって、真人にとって母親には真人の中ではなっていない。

- これはとても自然な事で、真人が「夏子」を追って「下の世界」に踏み入れたことから真人にとってはストーリーが展開して行くうちに欠かせない存在、つまり、母へと行って行く、真人の「夏子」の受容の物語としても捉えられる。これは真人の成長であって「教養小説」の定石を踏んでいる。
- 「夏子」は死んだ真人の母親と瓜二つということが、また、真人の心内を想像するに相当の葛藤の末に「夏子」を受け容れたということは誰もが想像できると思う。最初、「夏子」は真人にとって母であって母でないけれども、「夏子」を見れば否が応でも死んだ母親を思わずにはいられない真人にとって、「夏子」は、死んだ母親にこれまた瓜二つの真人自身にはある意味自己同一をどうしても強いられる鏡のような存在で、真人は母親が死んでいることもあって「夏子」からは逃れる術がないのである。この「出口なし」の状態を打開するためにも真人は自分で頭に石を打ちつけたとも取れるのである。幼い真人はそうすることで、なぜかは言葉では言い表せない憤怒を鎮めたとも言え、真人の自傷行為は、死んだ母親と瓜二つの「夏子」に甘えたい真人の相反する感情、または、欲求を満たすためには真人は頭を石で打ちつける行為をしなければ、真人自身が自分を見失う存在の危機に瀕していたとも言える。
- さて、ここで疑問が湧いてくる。大伯父と共に宇宙の闇に藻屑と消えた「下の世界」なき今、また、ワラワラのいない中で、「上の世界」に人間は生まれてくるのであろうか？
- その答えは「君たちはどう生きるか」のラストシーンで全てが語られている。
- この真人の夢綺譚のようなストーリーは果たして真人の夢として片付けていいのであろうか。私としては、これは日本人には連綿と続く古くは『古事記』の黄泉の国とその封印という天岩戸の物語との解釈も可能な日本文化の大河に与（くみ）する宮崎駿監督渾身の作品、また、「夏子」の出現で真人の現実が脅かされたことにより、真人が自分の頭を石で打ちつけたときに真人自身が夢綺譚への扉を開いてしまった「下の世界」を、真人自身がその扉を封印した上に、現実を受け容れた真人の存在確立の物語と捉えられると思う。このことはひと夢さえ人間は劇的に成長を遂げるという事を示していると思う。
- 以上の事が宮崎駿監督の人間観であり、世界観であり、「君たちはどう生きるか」に血道を注いだ宮崎駿監督の衝動だったのかもしれない。
- つまり、「君たちはどう生きるか」は観るものに、どんなに困難があっても現実からは逃れられないのだから「現実を受け容れなさい」と、そして、宮崎駿監督が未来あるものへと未来は託したぞ、という激励が含まれた埴谷雄高風にいうと「精神のリレー」を具現した宮崎駿監督の畢生の大作といえるかもしれないのである。